

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(51) 平成14年7月15日

## 農学・本草学シリーズ

### いわさきかんえん 岩崎灌園の『本草図譜』(K756/1)

岩崎灌園(天明6(1786)年~天保13(1842)年)は名を常正つねまさといい、江戸幕府の御徒あかち(歩兵)の岩崎家の子として、江戸で生まれました。幼少の頃から植物採集や栽培が好きで、庭に多くの植物を植えて比較し、記録のために植物の写生を行ったといわれています。文化11(1814)年、29才の時に若年寄堀田せつつかみまさあつ撰津守正敦の推挙で、屋代弘賢やしえひろかたの書籍手伝となりました。この時から彼は幕府の膨大な書籍を利用することができるようになり、これらの資料は彼の研究の糧となりました。正敦は、『本草図譜』作成の最大の支援者といわれています。彼は松平定信に登用された人物で、本草学の大家小野蘭山おのらんざんを医学館に招聘した人物です。この小野蘭山は本草学の系統上、岩崎灌園の師筋となります。『本草図譜』に松平定信のハスの図譜から写した図が多数あるのは、定信 正敦 灌園の関係によるものです。

文政11(1828)年43才の時に『本草図譜』の原稿ができたといわれ、天保元(1830)年にできた『本草図譜』山草部4冊の木版本に彩色して幕府に献上しました。彼の没年に『本草図譜』は巻56まで刊行され、巻60・64も刊行されてともいわれています。その後、巻96までの納本は嫡子信正のぶまさと小山広孝ひろたかにより行われました。当館所蔵の『本草図譜』は、大正10(1921)年に「本草図譜刊行会」から刊行されたものです。また当館には、灌園が文化15(1818)年に記した『草木育種』そうもくそだてくま巻之上・巻之下(K830/21)を所蔵しています。

『本草図譜』は、薬用植物だけではなく、園芸植物も取り上げています。特にハスは4冊、ツバキ、ムクゲは各1冊を用いて説明しています。ただし、栽培法については触れていません。また前部では重要な漢薬を扱うなど、漢薬の図譜の紹介を目的にすえていますが、彼は医者ではないため、漢薬の効用にまでは触れていません。明記されていませんが、数多くの箇所箇所で小野蘭山の『本草綱目啓蒙』を引用しています。『本草綱目啓蒙』には図譜がなく、『本草図譜』は豊富な図があることで、高い価値を認められています。配列順序においても、小野蘭山の『本草綱目啓蒙』と同様、李時珍りじちんの『本草綱目』に従っています。

日本に産しない植物の漢名は、世界の植物を図示したワイマン図を採用して同定しました。当時、ワイマン図は、宇田川榕菴の『物印忙』ウエイマンから活用できました。ただしワイマン図は、誤りを多く含んでおり、後の批判を招くことになりました。また1875年刊行のフランス人フランセーの『日本植物名彙』にこの資料が紹介され、図や日本名も引用されるなど、海外にも紹介された資料です。

#### 【参考資料】

『本草図譜総合解説』(499.9/11/1)

『江戸の博物学者たち』(499.9/9)